

わが郷土を語る (その39)

(2組) 中尾 佐之吉

除疫神「牛頭天王(ごずてんのう)」に寄せて

1) 郷土の守護神のこと

私たちの郷土、もとの「御津郡今村」は「今村百軒まる法華」のことがあのように、昔からの住民はほとんど日蓮宗信者であった。そして各集落にはその一画(主に墓地の近く)に、この地方への布教を最初に努められた、「大覚大僧正」の石塔・「南無妙法蓮華經」の題目石と地水神などを併設して、地区の守護神(お祖師さま)としておまつりしている(写真は岡山市平田の「お祖師さま」)。



ところで、このお祖師さまなどのほかに「牛頭天王」をおまつりしている地区があるので、この牛頭天王とはどういうお方か、そしてどのような趣旨でおまつりしているのかを調べ、書かせてもらうことにした。この牛頭天王をまつっているのは、この地区の周辺では、私の知る限り旧今村では平田、下中野野崎、下中野木村と旧白石村の今保である。なお、平田の牛頭天王の建立は慶応2年(1866年)のようだが、他の地区についてはその建立時期は不明である。

2) 「牛頭天王」とはどういうお方か

広辞苑によるとつぎのように書かれている。「もとインドの祇園精舎の守護神。除疫神として京都祇園社(八坂神社)などに祭る」とある。つまり悪い「はやり病」(伝染病)がおこらないよう、そして一日も早くおさまることをお願いできる神さまとしてまつられたことが知られる。

3) おそろしい「はやり病」(伝染病)はいつごろから

伝染病が昔この地方でどのように流行したのか調べてみる。例えば「コレラ」の例では、岡山での第1回の大流行は文政5年(1822年)で、第2回は安政5年(1858年)だ。この年岡山では299人の死者がでてい

るが、江戸では3万人が亡くなったとか。また明治12年(1879年)にはコレラが全国に蔓延し、死者は10万人以上だったといわれている。岡山県でも4,949人が亡くなったのだ。

この地方で牛頭天王がまつられたのも、コレラの流行と関係があったのではないと思われる。なお、伝染病で忘れてならないのは結核で、戦前では全国で毎年10万人くらいがこの病気で亡くなり、死因の第1位だったことはよく知られているところだ。

4) 世界一の長寿国になった日本

日本の平均寿命の推移を簡単にまとめたのがつぎの表である。

調査年次	平均寿命(才)	
	男	女
第1回生命表(明治24~31年)	42.8	44.3
第4回 " (大正10~14年)	42.06	43.20
第8回 " (昭和22年)	50.06	53.96
簡易 " (平成12年)	77.64	84.62

この表で知られることは、戦前は「人生50年」といわれていたが、現在では「人生80年」と胸を張ってもよいようになったことである。このことは乳幼児の死亡率の低下、感染症の減少、なかでも結核の克服などがその理由にあげられている。戦前、とくに私が子どもの頃は、田中野田の前述の守護神(お祖師さま)へ、毎朝お年寄りがお参りしていたのを知っている。いまは当時の姿は見られないが、在りし日の村人たちが病気の克服、災害の防除に有効なでだてをもたず、ただひたすらに神仏の加護を祈らずにはおられなかった心情に思いをいたすとき、医学の進歩や医療施設の充実等によって、現在のわれわれが健康で永生きできている事実をありがたく思うのである。

白鬚宮の境内 (1)

(5組) 吉崎 昭

神社やお寺の境内で何気なく見過ごしている社や祠には歴史や伝説、伝承がちりばめられているが、氏神様のそれは特に身近に感じられる。

白鬚宮境内の小さなお社を次々とお参りしていると、霊験力のあるいろいろな神々を勧請(神仏の分霊を請じ迎えること)して、『ムラ』を災害から守り家の安泰と繁栄を祈り感謝しながら暮してきた、この地域の先人達の思いと姿を教えてくれる。氏神がその摂社(祭神が本社に縁故深い神のこと)として、御霊神や流行神を勧請することによって豊作、病の平癒や長寿、幸運を祈るといった氏子の現世的な御利益願望の期待に応えることがしばしば認められるが、白鬚宮も例外ではない。

白鬚宮境内の右手に小さな社が三つならんで祀られている。右端は弁才(財)天である。弁才天はヒンドゥー教の創造神ブラフマ

一の神妃で、もとはインドの大河の女神であったがやがて言語や音楽を司る雄弁、技芸の女神となった(弦楽器のヴィーナーを抱え、乗り物の孔雀を従えている)。近江竹生島、陸前金華山、大和天川、安芸宮島、相模江ノ島を日本五弁才というが、湖沼や池の魔物を鎮めるとして全国各地で「弁天堂」が水辺に祀られている。また弁才の「才」に「財」という字があてられて日本の古い富の神である宇賀神(穀物の神、転じて福の神とされる)と習合し福德の神に質変した。白鬚宮でも福德財宝の神として祀られているが、水の神と福の神の両性格から鎌倉の宇賀福神社には洗い清めた金銭は福銭になり金運を授かるという銭洗い弁才がある。

ふつう仏は如来、菩薩、明王、天部、の四つの階級に分けられるが、最下位の弁才天のような天部はもともとヒンドゥー教の神様で、仏教に取り入れられてその守護神となった。最下位の仏さまだけにお願いが気楽にできると同時に、現世利益を授ける能力も卓越しているといえる。

また弁才天は七福神の一人としての信仰を集めているが、その反面非常に嫉妬深く男女の仲を引き裂くとも云われている…。

中央には大田命の社がある。この命は本殿ご祭神の猿田彦命の神裔で垂仁天皇の皇女倭姫に天照大神の鎮座する地として伊勢の五十鈴川上流の地を奉獻したことで知られるが、そのため猿田彦命とともに土地を護り開発する神様として尊崇された。また主祭神の猿田彦命は白鬚大神、養の神・道祖神(地域を守り、疫神悪霊の侵入を防ぎ、行路の安全を保障してくれる神)として祀られるが、道祖神には古来より縁結びの神としての信仰があり、大田命もそれを受け継ぎ白鬚宮でも長寿、縁結びの神となっている。養の神のお祭は12月15日で西伯耆地方では塞の神は早いもの順により相手をめぐり合わせるという伝承があり、14日の夜中を過ぎるとすぐにお参りする人達がいるという。

左端のお社は牛頭天王である。牛頭天王はインドの祇園精舎の守護神で祇園天神とも云い非常な荒神のため、日本では神仏習合の思想により気性の激しい(八咫の大蛇退治の神話がある)素戔嗚命と一体化され疫病を防ぐ神として、奈良時代から平安時代にかけて広く信仰された。

京都の祇園祭は八坂神社の祭礼であるが、古くは祇園御霊会と呼ばれて貞観11年(869年)に日本各地に疫病が流行したときに「是は祇園牛頭天王の祟りである」として災厄の蔓延を防ぎ、除去を祈ったことから始まった。また御霊信仰(政争など非業の死を遂げた人の怨霊が、疫病や天変地異などをもたらすものとして、これを御霊として鎮め崇める)が盛んになるにつれて、牛頭天王の加護を祈る御霊会が盛んに行われた。

牛頭天王の本地仏は薬師如来であるといい、地獄の獄卒である馬頭は観音に牛頭は大王に出世したともいい、縁起も諸説あっているような要素の合体した極めて陰陽道色の濃い習合の神様である。白鬚宮では疫病払いだけでなく保食神(食物の神)、五穀、家畜の神として祀られている。